

社会行動の系統発生的基礎

— 霊長類社会論の展開と人類へ至る道 —

木村光伸

はじめに

霊長類の社会的行動は人類のもつ行動特性の生物学的背景を理解するうえで重要な知見を与えてきた。とりわけ近年、比較認知科学の飛躍的な発展は霊長類の行動が内包している認知、類推、洞察といったもともと人間の存在様式の哲学的な表現のために活用されてきた用語を、生物一般の本性 nature に根差した概念として再構築した。もちろん、そのような試みの大半はチンパンジーのように高度に知的な環境把握力と行動様式をもつ動物における研究が基礎を形成してきたのであって、それはあたかも、かつてリンネ Carl von Linné が人間を *Homo sapiens* と呼ぶと同時にチンパンジーなどをその同類として配列したことも関係して、類人猿と人類を相同的関係者として先験的に位置づけるところに遡及して考察されねばならないのであろう。このことは霊長類学全体の流れを擬人主義的あるいは擬人類学主義的な方向へ逸らせてしまうという意味で学的体系の中で大きな問題点であったのだが、あまり顧みられることもなかった。私はことあるごとにそのような風潮に警鐘を鳴らしてきた（たとえば、木村、1983など）が、擬人主義的述語の耳触りの良さが霊長類社会論の一般社会への普及に貢献したこと、あるいは人間評価の理性中心主義的傾向もあって、いまひとつ厳密な学としての霊長類学を構築することができなかつたのである。

本稿ではそのようなあいまいさを残したままに体系化されたかのようにみえる霊長類の社会構造論を行動の系統性の視点で再考察し、現生種のそれぞれが持つ行動上の特性と社会構造の系統的相互関係を明らかにすることを目標としたい。そのことはわれわれが現生人類へ至った道を確認する作業でもある。

社会的な行動とは

生物はすべて社会的な存在であるという原則からいえば、取り立てて霊長類だけを特別視しなければならない理由はない。しかしその中に人類を含むという系統上の位置づけから見ても、われわれの存在の意味を論じる論拠のいくつかのうちのひとつとして、霊長類の社会的な行動に注目する価値は十分に大きいと思われる。

霊長類の社会的な行動を考えるにあたって、最初に注意しなければならないことは、現生霊長類を取り上げただけでも多様な社会的形態すなわち個体間関係のさまざまな展開の総体としての社会的諸関係をそこに見出すということである。やや厳密さを欠く表現ではあるが、霊長類の諸種はその生活史上の違いによって、しばしば単独生活者、ペア生活者、群れ生活者の3パターンに分類される。最後の群れ生活者はさらに単雄群と複雄群に分けられるが、それぞれ規模の大小やオス・メスの社会的性比などの特

徴によってさらに細分化されることもある。それらの群れ構造が重層化して巨大な集団を構築するゲラダヒヒのようなものさえ存在する。このような社会集団のあり方を考察した伊谷純一郎はそれぞれの集団の最小基本単位を単位集団BSUと呼び、その相違が当該種の社会進化における位置を示すものであると考えたのである（伊谷，1973）。そして、そのような単位集団のあり方があたかも霊長類を進化史的に区分する系統として再現できるように判断し、系統論を描いたのであった。もっとも伊谷が描いたような社会形態の比較による系統論は、その前提として個別の種の社会構造とそれを支える社会的な諸行動が具体的かつ生態学的に明らかになっていなければならない。

ダリオ・マエストリピエリは『マキャベリアンのサル』を著して、サルの本性的の中に見える人間行動の遺伝子的背景を考察した（Maestripieri, 2007；木村訳，2010）。これは一種の行動論であるのだが、そこで彼はアカゲザル *Macaca mulatta* の社会的交渉のプロセスに横たわるオスとメスの基本的な生存戦略の相違を次のように描写している。

ある種ではオスが消失し、他の種ではメスがそうなり、少ないながらある種では両方が集団から転出するという点については、多くの、そして複合的な理由がある。アカゲザルではオスが消失するのだが、それは彼らにとってはそのほうが、メスが消失するよりも経済的であるからだ。メスの拡散はおそらくリスクの高い取引なのだろう。メスが自分の生まれた群れを出て、長時間にわたって単独で過ごしたなら、とても捕食者に襲われやすいだろうし、他のアカゲザルに攻撃される危険もあるだろうし、彼女の子どもたちはおそらく殺され、食物を手に入

れるのも、他の個体から食物を守ることも困難であろう。オスが群れから消失するときにも、彼らは同様の危険に直面するけれども、それはメスの場合ほどには多くない。加えて、メス同士と一緒にいて彼らと食物資源を分けあっている状態は、アカゲザルのメスにとってそれほど悪いことではないけれども、他方オスにとってはオス同士がそうすることは難しいのである。自分自身の集団内での繁殖にかかる費用対効果と拡散することの費用対効果の間のつり合いは、種によってさまざまであり、なぜ分散の仕方に種差があるのかを説明している。

（木村訳，2010）

ここで彼が言っていることは、霊長類の種はそれぞれに環境との関係においてその生活のあり方を選択しているのであるが、そこでの「生き易さ」の指標として顕現しているのが、個体間の関係とりわけ同性間の親密さや同所性（共存性）であり、さらにはオス-メスの性的な結合性を通して観察される諸関係なのであるということだ。BSUに認められる構造を延長したところに人類社会の構造を解くカギがあるのかどうか。そのあたりを生物学的な問題として考えることの意味を次節で考えてみよう。

サルからヒトを考える？

人間とは何かという人類史における究極の命題は、哲学・人間論的分野からのアプローチによる精神あるいは心身問題についての考察と、生物学的分野からのいわば還元論的技術革新をベースにした生命の物質的解明という二つの車輪を推進力として、着々と解明されてきたかのように見える。とりわけ20世紀は人間理解のための新しい時代であったといえる。そのよう

な人間理解に関する科学革命の中にあっても、「人間はいかに動物であるのか」、あるいは「人間はいかにほどに〈サル〉的な存在から独立した〈人間らしさ〉を獲得したのか」などということを考える方途については、実りある議論がたくさんなされてきたとは言い難いのではないか。

とくに人類学の1分野として独自の方法論をもって「サルからヒトへ」のプロセスを解析してきたと自負する霊長類学は、高等動物におけるヒトを含む系統群としての生物の一群を対象として、およそ1億年にもおよぶ霊長類の進化の過程（系統と分化）を化石資料に求め、その歴史的な結果としての現生種の多様性を生化学的分析手法と生態学的な観察手法によって明らかにしてきたと主張するであろう。

しかしながら、そこにはいくつかの論理を超越した関係性が前置されてきた、ということについては、ほとんど注意が払われてはこなかった。とりわけ現生種の生態学的知見から「サルからヒトへ」というプロセスを洞察する際には、そのような慎重な認識が不可欠であったはずだ。その代表格が「サルの行動にはヒトの行動の萌芽が存在する」（これを一般的に拡張するとサルはヒトの前駆的生物）という考え方であろう。サル類の観察から得られる結果は「観察したサルが〇〇の行動をした」という事実すぎない。この事実は当該のサルが観察者の眼前で示した動作、表情、音声その他を通して、観察者が（人間としての）感覚で得ることのできる具体的な（記述可能な）事実と複数のサルがそれらを相互に相手に向けて（あるいは相手を避けて）発することから推察できる彼らの社会的な意味における関係として限定的であるべきだろう。

ヒトを知ってサルを思う

とりわけ日本の霊長類学はサルの行動を無邪気にヒトの概念で記述してきた。そのことは何度も批判的に指摘してきた（木村、1983、2006など）が、今回はさらにサルの研究がいかにヒトについての知見を人間学として総合化することに貢献可能かという視点で、サルと人間化したヒトの間に横たわる生物としての連続性（あるいは非連続性）という問題に絞って考察してみたい。

ここで取り上げるのは、音声一言語、優劣一支配関係、オス・メス一性的関係の文化人類学的意味などのように、サルの観察からデータを提供できる生態事象のうち、人間の社会関係において特殊な意味を付与された行動概念である。われわれは人間の言語（つまりは人間的思考あるいは価値づけ）によって他の生物の生存の様式を意味づけするという「科学的」態度を身につけて近代を生きてきた。動物の「行動」「生態」が、そのような記述で正確に表現できているのかどうかを省みることもまた必要なのではないか。

ニホンザルの観察を通して彼らの社会構造を知ろうとする試みから始まった日本の霊長類学は、いまや現生霊長類のほぼすべての分類群を対象とする総合霊長類科学となった。生態学的な意味での野外研究（狭義のサル学）という分野はすでに霊長類学の小さな一部分に過ぎなくなり、実験諸科学と近代装置で武装された古生物学などの支えなしには、独自の理論的展開が困難な状況にある。双眼鏡の向うに野性の世界を見るなどというロマンティックだが曖昧な観察論文で現代「科学」の一員の立場を守れるはずもなく、野外研究もまたその精緻化を迫られて久しい。霊長類学を取り巻くそのような情況

の推移の中で「サルを知る」ことの意義はどのように理解され、評価され、また再認識されてきたのだろうか。

日本のサル学がニホンザルの調査研究を通して解明を試みたいいわゆる社会構造論では、霊長類社会を記述するための多くの概念と用語が提出されてきた。それらは、しかし、自然科学全体の共通語としてではなく、サル学と現実的な人間社会を繋ぐアナロジーのための記述形式として重宝されたのであって、科学的に厳密な用語として定着したとは言い難い。そのためにサル学独自の発想は、科学という舞台以上に、マス・コミュニケーションと連動して社会に拡散されたといつてよいだろう。それほどにまたサルの社会行動は人間にとって面白かったのだ。「サルを見て自らを振り返る」という行為が、「ヒトの振り返り見てわが振り返り直せ」ということと同様に、人間規範の問題として理解されたのだともいえるかもしれない。かつて流行したコマーシャル・コピーのように「反省だけならサルでもできる」のかどうかはともかくとして、それは科学としてのサル学が日本で誕生して以来の宿命であった。

とはいうものの、サル学は人間社会の原初形態を追及するための証拠探しとしても重宝された。今西錦司(1951, 1961, 1966, 1968など)の主宰した霊長類研究グループは、人間家族の起源をテナガザルのペア型社会、さらにはゴリラの単雄群に求め、その後、チンパンジーの離合集散する群れの中に人間社会と文化の起源を探ってきた。研究の初期から野外研究の指導的立場を占めてきた伊谷純一郎はすでにこの世を去り、研究の中心は今西から数えて孫・曾孫の時代となったが、家族の起源の問題は山極寿一(1994など)らによって、いまも追及されている。最近のアフリカでは、人類がチンパンジー

の祖先と分岐した頃に十分近い年代の人類化石が発見され(White et al., 2006)、いよいよ人類誕生が神話から実証の段階を迎えようとしている。ここでも狭義のサル学は人類進化のパーспекティブを描くことに貢献はしたが、最終的には歴史の証拠を握る実証科学にその成果を譲らざるを得なかった。

生きたサルを見てわかること

筆者は1970年に幸島のニホンザルに出会って以来、いくつかの場所で同種を眺めつつ、その後、南米コロンビアのアマゾン最上流部に広がるマカレナ熱帯林に生息する数種の霊長類について野外調査を継続してきた(Kimura, 1999; Yumoto T., K. Kimura, A. Nishimura, 1999; 木村, 2005など)。中南米に生息する霊長類は新世界ザル(分類学上は広鼻猿類)と総称されるが、その中に含まれるマーモセット科およびオマキザル科には少なくとも47種もの多様なサルが存在している(Grove, 2001)。同地に霊長類が生息したであろう4千万年に及ぶ長大な時間の中で、たとえばアマゾン熱帯森林の環境条件はきわめて安定的であったらしいということを考えれば、そしていまから1,000万年前にはすでに現生種の大半が形態的には現在とほぼ同じ姿で存在していたらしいという古生物学的事実を付加するならば、現生種の多様性は彼らの生息環境を十分に反映したものであると考えられる。伊沢紘生を中心とする調査隊が1971年に研究を開始し、とりわけコロンビアのアマゾン最上流域にマカレナ調査地(1975-1977, 1986-2002)を確保して以降、中南米のサルたちもまた霊長類の本性natureを知るための重要な対象となり(Nishimura et al., 1995)、同地ではこれまでに7種のサルたち

が調査されてきた。もっとも人類誕生の舞台を遠く離れた地で展開したサルたちのストーリーが、人類の起源と進化の問題をどのように解き明かすことが出来るのか、それは誰にもわからなかった。ただひとついえることは、ひとつの系統群の中で生起する多様性にこそ、人類進化を解く鍵が隠されているということであろう。われわれは伊沢を中心とするグループによる集中的な調査でマカレナ調査地に生息するケナガクモザル集団の離合集散する日常的な社会変動を明らかにした（伊沢編，2000）。しかし、進化はアナロジーでは語れない。中南米のクモザルの離合集散する社会形態がいかにチンパンジーのそれに外形的に似かよっていたとしても、それで進化の問題が解けるわけでもあるまい。それともそのような考え方はあまりにも科学的冒険心の欠けた自己規制に過ぎないものなのか。

サルとヒトの関係を考える場合、連続する進化の道筋として論理化するのか、それとも生物進化の必然である多様性に主眼を置くのかという方法上の違いが存在する。旧世界における人類進化研究は主として祖先探しの旅のようであったわけで、しかしその行き着く先に「サル類の社会」イコール「人間社会の原型」があったわけではなかった。つまり、サル類の研究が人類進化にどのような示唆を与えてくれるのかという点がよくわからないままに、「サルはヒトの祖先」という、誤ってはいないが正確でもない観念が霊長類学をリードしてきたのであろう。そしてそこでは多様性の理解という視点が忘れ去られてきたのである。

チンパンジーの野外研究は人間の理性の起源という問題にひとつのヒントをもたらした。彼らの集団の複雑な個体間関係はあたかも「政治をする」かのようであったし、そのように擬人

化して考えることでチンパンジー社会それ自体の問題もクリアに見えてくるようであった（西田ら，2002など）。平行して進行している実験的シチュエーションからの知見（Matsuzawa *et al.*, 2006など）がチンパンジーの心的状況の人間臭さを演出し、チンパンジーはもうちょっとで人間になれる存在であるかのように表現された。このように科学が明らかにした進化の道筋は否定されるべきではない。しかし、それではチンパンジーはサルの世界とヒトの世界を繋ぐ生きたミッシングリンクなのだろうか。

チンパンジー研究が人類進化の痕跡を生き証人に求めた結果、サルとヒトの間に横たわるルビコン河に橋が架けられた。ヒトは動物種としてまっしぐらに進化してきたのであり、だからこそ人類は自然を離れては存在し得ないのである。しかしまだ疑問は残る。チンパンジーの祖先の一部が畢竟の幸運によってヒトに進化した傍らで、あまたのサルたちはどのような進化の道を歩んできたのか。いや逆に彼らの進化のありようから、人類進化の本当の意味が見えてくるのか。南米熱帯林の暗く、しかし、たおやかなる自然の中でサルたちを眺めていると、彼らの悠久に変わらぬ生態こそ、あまりに変貌する人類の生態を映し出す鏡であるようにも思える。ヒトは何ゆえにヒトであるのかという問いかけに対してサルを観察する者からの視点でいうならば、ヒトのもつ「個性性を主張することの激しさ」こそがヒトらしさの源泉であるのではないかと感じられるのである。

「個性性を主張する」ということの意味を私は「他者に対する積極的な関わり」あるいは「攻撃的な交渉」という概念で理解しておきたい。そういうことで言うならば、ここで霊長類の社会行動を発現させる内的要因としての攻撃性の問題に触れておかねばならない。社会行動ある

いは社会的行動というのは、複数個体間に生起する行動の相互関係の中で、他者に対して何らかの影響を与えるようなコミュニケーションのためのツールである。時にそれは信号signal的であり、その行動と一対一に対応するような意味を付加された記号signのような機能を果たすものでもある。しかし、一般的には、いかなる社会行動であれ、行動の提示者と受容者の間には何らかの理解が生じる。ただしそのような理解がいつも肯定的であるというわけではない。つまり、激しく個性性を主張することの中には、送り手と受けての間の共有空間が存在することを是認する必要がある。そこにこそ種の個体としての共同化の過程を見て取ることができるのであろう。

人間存在を考えるとということは古代ギリシア以来のわれわれ人間の課題であった。自らを考えるということの困難さをこれまで多くの哲学者たちが乗り越えてきた。しかし人間それ自体をいくら眺め続けたとしても、そこにヒトの歴史を読み解くことは困難である。科学はたくさんの傍証を必要とし、そこで登場したあまたの論理体系のひとつが霊長類学であった。霊長類学は人類学よりも大きなカテゴリーを抱えており、そこでは人間という存在は地球上で起こったすべての歴史的事実が産み出した輝く成果、いや鬼っ子なのかも知れない。人間は自らを検証することを欲し、自らの存在の不確実性を自覚した。人間が偶然の産物として現在の地球に在るのか、それとも進化という時系列的必然の結果なのか、われわれにはわからない。ただ、人間という不可思議な存在をめぐって、多様な議論が必要であり、それが自然科学の法則に沿ったものであると同時に、認識論的検討に耐えうるものであらねばならないという困難に、われわれが直面していることだけは確かであ

る。

ヒトはどこまでサルか

ダリオ・マエストリピエリ(2007)はアカゲザルの個体認知の能力と社会的な協調との関係を次のような事例を提示してきわめて明瞭に示した。少々長い引用を拙訳で提示したい。

未成熟なオスのアカゲザルが研究者グループによって捕獲され、テストのために暗いコンクリートの建物の中に連れてこられた。彼は檻の床上で快適な時間を過ごすために、沈静と睡眠の時間を与えられた。やがて、このサルは眼を覚まし、立ち上がり、眠そうにその場に座る。さらに時間がたって、機敏になると、檻の中を歩き回り、そこから逃げ出そうと不安げに見回す。ドアが開かれると、サルは一目散に彼の残りの仲間がいる放飼場へと逃げ帰る。たくさんのサルの目が、ほんのちょっとの間、新入りに注がれ、そして何事もなく他を向く。警戒される理由は何もなく、彼はバディなのだ。今日、彼は移動し、そして戻ってきたのだ。年長のメスザルがそれまでしていたグルーミングに戻り、群れで最上位のオスザル(霊長類学ではアルファ・オスと呼ばれならわされる)は再びうたた寝を始め、子どもたちはジャングルジムで遊びの続きをする。バディのお気に入りの遊び仲間が彼に歩み寄り、彼をまきこみたがっているように見える。彼はバディを押し、追いかかせようとするように走り去る。でも、バディは追いかけてこない。彼はバディのわき腹に飛びかかり、ゆっくりと元の場所に歩いて戻っていく。なんだかおかしい。たくさんの目が再びバディに注がれる。大きくてたくましいわかもこのオスの乱暴者が、バディに近づき、彼を

にらみつける。バディは当惑した表情で少しの間、彼を注視してから、顔をそらせた。乱暴者はバディの腕に噛みつく。バディは痛みで悲鳴をあげて逃げ去る。しかし、ゆっくり、ゆっくりと。乱暴者はすばやく彼を捕まえて、今度は耳にまた噛みつく。さらなる悲鳴が。他の2頭の子どもたち—そのうちの1頭はバディの遊び仲間—とおとなのメスザルが興奮した様子でバディのほうへ駆け寄っていく。彼は逃げようとして、彼らに捕まり、再び地面に伏せ、彼らは寄ってたかって噛みつき、金切り声をあげる。バディの腕や顔を引っかき、その指や尾に噛みつく。

すべて一瞬の出来事だ。しかし、研究者たちは見ていた。バディがぶざまにやられるのを見た瞬間に、彼らは出来るだけすばやくバディを救出しなければならぬことを理解した。彼らがバディを捕まえると、彼は自分で個別ケージに入る。ひどく怖がってはいるが、怪我はしていない。2時間後に彼はグループに戻る。かれの遊び仲間や他の子どもたちが彼に気づき、彼を引っつかむ。彼は子どもたちをつかみ返し、3頭で取っ組みあう。それから彼は追いかけられるが、今度はすばやく逃げて、つかまらない。彼が走ったので、不注意にも1頭のおかんぼうにぶつかって、その子を倒してしまう。すぐにそのおかんぼうの母親がやってきて、その子を抱き上げると、にらみつけと大きく開けた口で、バディを威嚇する。バディはおかんぼうの母親に自分の歯を見せ、尻尾を上げて彼の後方にいる他のサルに性器を見せる。何も起こらない。母親はぐるりと向きを変えて歩き去る。バディは餌の山に歩み寄り、りんごをひとつとって食べ始める。いまや誰も彼に注意を払わない。

バディは毎日、放飼場で他のサルたちと過ご

している。彼らはみんな同じ餌を食べ、一つ屋根の下で眠る。バディの家族は群れの中での社会的地位が低い、彼らよりも社会的階層の低い複数の家族も存在する。彼は他の家族の子どもたちと多くの時間を過ごす、年長のオス・メスともつるんでいるようでもある。彼らはバディが生まれたときにはすでにそこにいた。彼があかんぼうだったころ、彼らはバディを抱き、かわいがった。彼らはバディの日々の成長と彼の生活の毎日を見てきた。だが、その日、研究者たちがバディをグループの外へ連れ出さなかったら、彼は殺されていただろう。彼の母親とおばたちは彼を守ろうとするだろうが、おそらく効果はなかつたろう。

バディが最初にグループに戻されたとき、彼は麻酔から十分には覚めていなかった。その所作は、すぐになにか不具合が彼にあることを告げていた。彼はいつものようにすばやく走らなかつた。彼は服従の信号をともなって脅しへ反応しなかつた。彼は保護を求めて母親のところへ走り戻らなかつた。彼は弱く、攻撃されやすかつた。他のサルたちの行動は好意から不寛容へと、遊びから攻撃へと、すばやくそして劇的に変化した。バディの攻撃されやすさは、他の者たちにとって古い序列を沈静させて、自分の優劣順位における位置を改善する、あるいは未来の良きライバルを消去するチャンスとなった。アカゲザルの社会では、1頭のサルの社会的地位の維持、他者への許容性、結局は生存のためのすべてが、彼が如何に速く走り、正しい信号を、正しい相手に、正しいときに、効果的に使うかに係っているのである。アカゲザルはある朝に目覚め、少し眠気を感じ、そして彼のもっとも良き友だちに殺されるという危険に直面している自分を見出すのである。

(木村訳, 2010)

この事例は、アカゲザルが仲間（この場合には自分と同じ集団として飼育されている他者）の存在を十分に認識していること、およびそのような認識が攻撃の抑制には必ずしも効果を持つものではないということを如実に示している。仲間というものはつねに他者との間で了解可能な社会的なシグナルを発信し続けるものであって、顔を知っているとか、かつて遊んだことがあるといった経験によって十分に支えられるものではないのである。そのような社会関係はアカゲザルの近縁種であるニホンザルにおいても認められるが、私の観察経験からいえばアカゲザルほどには極端ではない。両者を含む *Macaca* 属がアフリカ北部からアジアに広範囲に分布を拡大させつつ種分化を遂げてきた過程で、どのような負荷がそれぞれの種に影響を与えたのであるか、あるいは環境要因や種内の密度効果が如何なる働きをしたのかを知ることは困難である。しかしこのような社会的対応の相違が進化史の中で適応というプロセスを通してそれぞれの種の社会性を形成したのだということだけは間違いないだろう。

動物の社会性を論じる際にはもうひとつ必要な前提条件がある。それは社会という概念が動物においては社会それ自体の契約的行為として確立されたものではなくて、動物がそれぞれの種として進化過程において獲得した、いわば遺伝子に基礎づけられた表現型として定着したものであるということだ。この点において、人間の社会性とははっきりと一線を画すべきである。しかしながら、人間の社会性においても進化の過程で遺伝子に反映してきたさまざまな行動性向とそれを担保する衝動と呼びならわされている内的動因が存在する。つまり動物の社会性と人間の社会性には重なり合う部分とそうではなくて人間にのみ特有な部分とが認められる

のである。人間社会の行動学的な基礎を問うという行為は、それゆえに霊長類各種における社会構造あるいはBSUの単純な形態的比較に止まってはならない。

ふたたびサルとヒトをめぐる議論へ

人類の起源を考えるという行為は、人間の自己をめぐる論理展開としては、はなはだ奇妙なことである。アリストテレスが人間を「理性的なる靈魂を属性として持つもの」として位置づけたのは紀元前4世紀のことであった。それとは独立にユダヤ教が唯一絶対神と人間の関係を「創世記」という形で示し、その後のキリスト教時代を通じて「創造主は、自らにかたどって創造されたものにすべての生命を支配させた」という信念が持続され、それこそが人間中心主義のほとんど唯一のよりどころであった。しかるに18世紀のカール・フォン・リンネが『自然の体系』（1735）において「生物の一員としてのヒト *Homo sapiens*」という定義をなしたことで、キリスト教的敬虔からみれば、人間は動物の位置に貶められたのである。人間が自らの存在を振り返るとき、それは常に完成された形としての人間であり、外的な条件では揺るがない存在としてのそれであった。少なくともチャールズ・ダーウィンが世界のすべての存在理由を神の手から奪い取るまでは、そうであったし、そういう視点でのみ、人間は存在の価値を考えることができたのである。ここでふたたび生物概念としてのヒトと社会概念としての人間とを描き分けることで、現代における人間の位置を探っておきたい。

1859年に著された『種の起源』の最終章で、ダーウィンは「さらに一層重要な研究のための開かれた分野を将来に見る」と書き記して

いる。彼は心理学が「漸次的変化による各々の精神能力および精神容量の必然的な獲得という基礎の上に、堅固に築き上げられ」て、「多くの光明が人類の起源およびその歴史の上に投ぜられるであろう」と述べて、人類進化過程に科学の光が投与されることを予見させている（ダーウィン著、堀伸夫訳『種の起源』槇書店、1859）。もっともここで彼が人類史全体を精神の問題として、つまるところは頭が良い動物としての人間という観点から解明されるべき課題だと感じていたこともわかるところが、いかにも19世紀的で面白い。ダーウィンはさらに1871年に『人類の起源』（池田次郎・伊谷純一郎共訳、中央公論社、1967）を発表し、『種の起源』刊行以来ずっとダーウィンの想いから離れて一人歩きしていた人類の起源と進化の問題に対する彼自身の見解を述べた。ここで驚かされるのは、当時の比較解剖学、発生学および霊長類を含む脊椎動物の分類・系統論の質の高さである。もちろん具体的な種とその系統的な位置づけには過ちも少なくはない。しかし、彼らの時代には進化という自然がもつ自律的な法則性への確信にも似た「信頼」があったといえる。ダーウィンの『人類の起源』は「人間がより下等な生物から由来した」というひとつのことを論証するために書かれた。しかし、われわれが如何に醜悪な動物（ダーウィン自身は野蛮な風習をもつ原始人と近代人を峻別するのだが、そのあたりは別の問題として、最後に取り上げよう）の末裔であったとしても、そのことで人間存在を卑下したりはしない。むしろ、どのように理性的で、知性的で、科学的認識に長けていても、人間は「より下等なものの子孫」であることに違いはないということを強調するのである。ダーウィンはいう、「人間はあらゆる高尚な資質をもち、どんなに品性下劣なものにも同

情を寄せ、人間だけにとどまらずどんな下等な生きものにも慈悲心を及ぼし、神のような知性をもって太陽系の構成やその運行まで見通すなど、このような崇高な力を身につけているのだが、それでもなお、人間のからだのつくりとか器官には消し去ることのできない刻印が刻まれている、それが人間の起源の下等なものからの由来を示しているのだということを認めなければならぬ」（前掲書『人類の起源』）と。これほどまでに人間の理性とそれゆえの尊厳を自らのものとしつつ、人類の自然性を主張したものは他にはいない。

人類進化についての新たな発見

人類が起源した場所としてダーウィンはアフリカ、あるいは少なくとも旧世界という見当をつけていた。その最大の根拠は、人類のもつ特徴は狭鼻猿類のそれとの相同性を示しているからだというのが、かれの主張であるが、同時にまた「脳が著しく発達したことで、直立姿勢をとったことの結果」として「人間は『霊長類のいくつかの例外的な種のひとつにすぎない』ことを心にとめておかねばならない」ともいつている。ダーウィン自身は「脳の発達」と「直立二足歩行」の関係について論じてはいないのだが、これらの特徴が人類を定義づけるものであるという見解は当時としては卓見であったろう。

ダーウィンの「預言」は化石の発見という古生物学的手法で現実のものとなっていった。デュボアによるジャワ原人の発見（1879）、ブラック・斐文中らによる北京原人の発掘（1927）など、後に原人（ホモ属の一部）として纏められていく一連の化石群がアジアにあり、他方、レイモンド・ダートに始まる南ア

フリカにおける、そしてルイス・リーキーらによる東アフリカにおける、一見多様な猿人化石群（アウストラロピテクス類など）やホモ属化石群の発見が示すように、20世紀前半は人類進化の軌跡が次々と明らかにされていく時代であった。しかし化石は多くの難問を研究者に突きつけたのである。中でももっとも大きな謎は、初期人類と思われるアウストラロピテクス類のいかにも小さすぎる頭骨（具体的には脳容積）であった。化石による人類進化研究の初期にイギリスからひとつの標本がもたらされた。1911年のことである。ピルトダウン人と命名されたこの化石は、大きくて現代的とも思える頭蓋骨と原始的な顎骨の組み合わせによって、誰にも人類の曙を想起させたに違いない。1951年に大英博物館のオークリーらによって、これが人為的に細工された贋物であることが暴露されるまで、人類学の世界はすっかりこの骨に騙され続けたのである。しかし、騙されたものを嘲笑ってはいけない。当時は、そしていまでも素朴な感情としては、人間の祖先が貧弱な脳の持ち主であるはずがないという観念にわれわれは囚われていたのである。それこそ化石人類の存在をまったく知らなかったダーウィンの「預言」の呪縛でもあったし、アリストテレス以来の人間観の表れでもあったに違いない。

20世紀後半は人類進化の痕跡に横たわる未知の空域が次々と化石の発見によって埋められていく時代であった。リーキー夫妻とその後継者たちによる東アフリカでの人類化石発掘はあたかもゲームのように拡大し、ケニア、タンザニア、東アフリカ全域、そしてエチオピアの地においてホモ属とそれ以前の多岐にわたる化石資料の蓄積をもたらした。その中に1974年にエチオピアのアファール地方で発掘され「ルーシー」と名づけられた一体のヒト科化石がある。

およそ300万年前に生存していたと思われるこの化石人（女性）は頭骨片と顎から四肢にいたる主要な骨の多くが残存するという点で、きわめて貴重な情報を提供してくれる。彼らは貧弱な脳しか持たない存在ながら、まっすぐに立ち上がって二足歩行をしていたらしい。人類は頭からではなく、足から進化したのだということが、化石という事実によって証明されたのである。その後、ティム・ホワイトや諏訪元らによっておよそ440万年前に生息していたラミダス猿人（アルディピテクス・ラミダス）の発見（1994）があり、最近になってその総括がおこなわれた（*SCIENCE*, Vol. 326, 2009）。さらに2002年にはチャドで700万年以上過去に遡る可能性のあるヒトの祖先と思しき化石が発見され、サヘラントロプスと命名された。それらから浮かび上がってくる人類像は、少なくとも600～700万年以上前にチンパンジーと共通する祖先から分岐し、ラミダス猿人となったころには、現在の類人猿の歩行上の特徴であるナックル・ウォークも見られず、すでに直立二足歩行と慎重な木登りをしていたものと推測されている。アフリカで繰り返されたヒト科の進化は、何度かのアフリカからの移住を契機に旧世界全体への異なったいくつかの段階のホモ属の進出をもたらした。現代人すなわち *Homo sapiens* はその最終段階であり、おそらく15～20万年前にアフリカ南部で誕生し、その後、アジアおよびヨーロッパへとその分布を拡大していったと考えられている。

生活文化の特殊化とその背景にある人間性

現代人にいたって初めて、われわれは彼らに人間という語を当てることしよう。古人類学と考古学的な知見を総合すると、われわれ人間

の生活の質の基本は、すでにアフリカで創生されていたことがわかる。出アフリカという現象は、したがって、人間文化の原型が旧世界へ、そして最終的には世界全体へ拡散したということの意味している。全地球の民と化した人間の文化は、それゆえに、文化の原型の地域への定着と特殊化をもたらした。同時に人間自身の形質的特徴も地域固有の環境に適応し、多くの有意な差異を生み出していった。それこそが人種であり、それぞれの地においてかれらが身にまとったものを、われわれは固有の文化と呼び、その集団を民族と呼称するのである。

人間文化はそれぞれの地において、固有成り独立にその特性をあらわにしていった。その結果、地球上にはきわめて多様な文化形態が生まれ、その間の相関や歴史的相同性とそれぞれの異質性が、時には人間世界の融和や対立をもたらしてきた。それでも人間の分布にたいして、地球が十分に大きかった時代には、時として世界征服のような試みがあったにせよ、問題はそれほどまでに顕在化しなかっただろう。ところが大航海時代以降の人的流動性の高まりは、文化間の緊張を極度に高める結果となった。とりわけ20世紀以降の交通手段の飛躍的發展は地球の隅々までをひとつの価値観で縛りつけ、文化変容を強要し、あるいはグローバリズムの名のもとに文化価値評価の統一を図ったのである。

しかし、人類史の示すところによれば、人類は多岐に分化しつつ連続的な変化をもってホモ・サピエンスを生み出したのであり、それは現代の地球に存在する人間が、どこで生活し、どのような形態的特徴を持っていたとしても、さらにはどのような文化を身にまとうとも、すべて同一の種に含まれるものであり、価値の差異を含むものではないことを意味している。

ダーウィンが野蛮な風習をもつ原始人と近代人を峻別したのは、ヒトの進化的連続性とそれぞれの時代に存在する共時的な多様性を混同したためである。ホモ・サピエンスの進化的立ち位置を知った現在、われわれはひとつのグローバルな存在としての人間を正しく理解し、種としての統一性を根本原理とした科学的で平等・公平な社会の構築に努めなければならないのである。

遺伝的背景をもって成立している霊長類の社会行動は、多様な行動のパターンと複雑なシークエンスを拡張させ続けて現生霊長類の多岐にわたる社会構造をつくり上げてきた。そしてその延長上に、すでに遺伝子支配のみによらない社会の継続性と文化の継承過程を積み上げることで「人間らしさ」を形成してきたのである。しかしながら人間は、なお遺伝子によって操作される存在であり続けている。そういう諸事実を人間の知恵として自覚的に受け入れることで霊長類に基礎をおく社会的行動の人間論的意味を見出すことが可能となるのではないだろうか。

謝 辞

本稿は2008年度名古屋学院大学研究奨励金による成果の一部である。この間、関連する論考を総合人間学会誌の求めに応じて2度のエッセイの形で公表している。また、私とは社会行動の理解の仕方が同じであるとはいいい難いが、きわめて興味深い論考を取りまとめた書籍 *Macachaberian Intelligence* がシカゴ大学のダリオ・マエストロピエリによって公刊され、私がその翻訳書『マキャベリアンのサル』を仕上げる羽目になった。そのような過程で練られた私の考察を今回のとりまとめに際して大幅に再録

した。これで私の論理が一貫性を持ったかどうかはやや覚束ないが、表題の理論的理解として提出する意義はあると思考するものである。

文 献

- Darwin, C., 1859. *The Origin of Species*. 堀信夫訳『種の起源』槇書店, 1959.
- Darwin, C., 1871. *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*. 池田次郎・伊谷純一郎共訳『人類の起源』中央公論社, 1967.
- Grove, C., 2001. *Primate Taxonomy*. Smithsonian Institution Press.
- 今西錦司, 1951.『人間以前の社会』岩波書店.
- 今西錦司, 1961. 人間家族の起源—プライマトロジーの立場から—. *民族学研究*, 25: 119-138.
- 今西錦司, 1966.『人間社会の形成』日本放送出版協会.
- 今西錦司, 1968.『人類の誕生』河出書房.
- 伊沢紘生(編), 2000. 新世界ザル・クモザル社会の離合集散性とその適応的意味に関する研究. 平成8年度～編成11年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書.
- 伊谷純一郎, 1972.『霊長類の社会構造』生態学講座第20巻. 共立出版.
- Kimura, K., 1999. Home range and inter-group relations among the wild red howler monkeys. *Field Studies of Fauna and Flora, La Macarena, Colombia*, 13: 19-24.
- 木村光伸, 2005. マカレナの森と7種のサル—熱帯林における霊長類の同所性・歴史性・多様性をめぐって—. *名古屋学院大学論集, 人文・自然科学篇*, 41(2): 1-20.
- Maestriperi, D., 2007. *Macachiavellian Intelligence*. The University of Chicago Press. (木村光伸訳『マキャベリアンのサル』青灯社, 2010)
- Matsuzawa, T., Tomonaga, M., Tanaka, M.(Eds.), 2006. *Cognitive Development in Chimpanzee*. Springer.
- 西田利貞, 上原重男, 川中健二(編), 2002.『マハレのチンパンジー』京都大学学術出版会.
- Nishimura, A., K. Izawa and K. Kimura, 1995. Long-term studies of primates at La Macarena. *Primate Conservation*, 16: 7-14.
- Science (Ed.), 2009. *Ardipithecus ramidas* (Special Section). *Science*, 326: 36-106.
- White, T. D., 2006. Asa Issie, Aramis and the origin of Australopithecus. *Nature*, 440: 883-889.
- 山極寿一, 1994.『家族の起源—父性の登場—』東京大学出版会.
- Yumoto, T., K. Kimura and A. Nishimura, 1999. Estimation of the retention time and distances of seed dispersed by two monkey species, *Alouatta seniculus* and *Lagothrix lagotricha*, in a Colombia forest. *Ecological Research*, 14: 179-191.